

月の花挽歌 ～4.私鉄沿線～

4-4

「ポビーがパスポートの無効を理由に成田で逮捕され、牛久(茨城県南部の市)の収容施設に入れられていた時期なども含めて、バタバタしていたからな。叶うことなら、対戦してみたかったのが羽生の本音だろう」

「ポビーの棋譜に感動して、チェス界のモーツアルトと評したことは、今でも語り草になっている」

「冷静沈着な羽生善治を、あそこまで熱くさせた……魔界に踏み込めるのが天才の特権だとしたら、我々は俗人で良かったんだ」と山川は言ってコップ酒を飲み干すと、女将に一升瓶を持ってこさせた。

つき合い酒のつもりが深酒になっていた。

ポビーを肴にしたせいだろうと、昌幸は自分に言い訳をしていた。

山川はチェス界の近況を絡めた四方山話を熱く語り、珍しく饒舌になっていた。

「ところで、クイーンサクリファイス(ポビーが十三歳の時に指したクイーンを捨て駒にして世紀の一局を制した大胆な戦術)を指したことはあるのか？」と山川が尋ねた。「おや？」と感知した昌幸は、山川の口調が変わったことを聞き逃さなかった。

すでに一升瓶は半分ほど空いてしまっていた。女将さんが、さり気なくチェーサー(口直し用の水)を用意してくれた。

女の話から逸れたことに安堵していた昌幸だったが、不意に変化した山川特有の言い回しにたじろぎながらも、「イメージで指したことはあるが……」と慎重に答えた。

「イメージ？ そうだよ、我々の棋力では実戦には無謀だね」と仕掛けた先から手の内を明かしてしまうほど、山川も酔っていた。

「そろそろ、お開きにするか？ 女将さんお勘定」と支払いを済ませようとする昌幸に「アイカワラズ、オンナニハ、ブキヨウダナ」と

呂律が回らなくなり始めた山川は言った。

急に、みぞおちから左上腹部に激しい痛みを覚えた昌幸は、悟られないようにしてトイレへ行った。

便座に座ったまま腹痛と吐き気を抑えていると、脂汗が額ににじんできて、便器を抱え込んで嘔吐した。(またか……コンチクショー)と呻吟しながら、どうにか落ち着くのを待って、努めて平静を装い、席に戻った。

長い時間が過ぎたような気がして、心配されると思ったが、意外にも山川は女将さんと談笑していたので昌幸はホッとした。